



TABUNKA MIXER

～外国人スタッフが考える多文化共生～

(一財) 自治体国際化協会 多文化共生課 プログラム・コーディネーター 前田 クリスティーン・梨菜

TABUNKA MIXER とは？

「ミキサー」と聞くと、キッチン用具が頭に浮かぶかたが多いのではないのでしょうか。色々な物を混ぜて新しい物を作る—TABUNKA MIXER (多文化ミキサー) は、多様な背景や経験を持つ在住外国人の交流を通して新たな発見を試みるという意味から芽生えました。同時に、積極的に自ら何かを促す主体である「ミキサー」でもあります。TABUNKA MIXER は、新たな誕生や出会いを呼びだす季節、3月4日(金)にはじめて開催しました。

当日は、主に地域国際化協会で活躍している外国人スタッフ8名の参加者が、情報共有をはじめ「外国人スタッフが考える多文化共生」をテーマとしたグループワークショップや意見交換を中心に議論しました。それぞれの経験や思いを共有するとともに、外国人スタッフならではの視点から、いじめや未就学児童の問題など幅広く今後の日本における多文化共生社会について考えました。

参加者は、全員外国人・外国にルーツを持つ方で、韓国、フランス、ブラジル、イギリス、アメリカ、ペルー、フィリピン、中国とそれぞれ出身国と活動地域が異なりました。そのため、異なる意見もあれば共通点も多々あり、まさに多様性が目に見える会となりました。



フリートークの様子

当日のワークと成果

限られた時間の中で、主に三つの項目を達成しました。

①**情報共有** 各団体の取り組みや地域における在住外国人の情報をはじめ、自己で抱えている業務・課題・思いを紹介しました。取り組みの内容には地域の特色がみられ、物事に対する考え方も出身国の文化などによって変化することがわかった一方、責任感と信頼を得たいという点では全員が賛成している様子が覗えました。また、実施事業については、実際に人と人が言葉を交わし、ふれ合い、交流と事業の結果が感じられる企画を増やしたい、そしてよく耳にする「交流」と言う言葉を考え直す必要もあると皆頷いていました。

名前	所属	役職	出身国
成 主映	(公財) 宮城県国際化協会	韓国語相談員	韓国
デピノ・ルドヴィク	(公財) 茨城県国際交流協会	国際交流員 (CIR)	フランス
小松 パトリシア・紘美	真岡市国際交流協会	通訳・相談員	ブラジル
ラヴィン・ニコラス	高岡市・高岡市国際交流協会	国際交流員 (CIR)	イギリス
セラ・カイル	名古屋市・名古屋国際センター	国際交流員 (CIR)	アメリカ
上原 ジャンカルロ	(公財) 三重県国際交流財団	専門員	ペルー
八嶋 アーリーン	(公財) しまね国際センター	嘱託職員	フィリピン
谷尾 陽子 (楊 軍)	(一財) 熊本市国際交流振興事業団	相談員	中国

当日の参加者

②**グループワーク** 「子どもの教育」をテーマに現代の日本における教育について、より“多文化共生社会”に相応しい環境を作るには、どのような取り組みを創造するべきか、個人作業とグループワークを通じて考えました。日本以外での教育現場を体験した知識をもとに「いじめ体験授業」と「インターナショナルスクールでの未就学児童教育」は、現代の日本で実施するには課題がたくさんあるものの、在住外国人ならではの視点や想いが含まれており、実現すればメリットは大きいと思いました。



グループワークの成果を発表している様子。

③**フリートーク** 日頃、なかなか口に出せない悩みや想いを率直に打ち解けられる時間を設けました。私自身も日本においては外国人として、外国人同士でないと分かち合えない、アドバイスを素直に受け入れられない事もあるからこそ、この時間が一番重要だと感じました。私は会話を引きだそうと最初に質問を投げかけました：

- 1) 今の仕事内容に満足していますか？
- 2) やりがいが感じられる・感じられない業務は？
- 3) ほかの職員に理解してもらいたい事は？

参加者の回答には似たような点はあったものの、一つ一つを比べるとそれぞれ違っており、外国人の中での多様性が見てとれました。「外国人だとしても、そういうくくりや国柄に基づかず、個人として見てほしい」「任せてもらえる仕事を与えてほしい」など共感できる発言は、目からウロコが落ちるようでしたが、今思えば日本人でも普通にありうることに思えました。

もっと頻繁にオープンなコミュニケーションを取っていれば互いの理解はもちろん、“多文化共生社会”を実現する理解も自然と構築されていく気がしました。最後に、“多文化共生社会”とはそもそもどういう社会なのか、語ってもらいました。

多文化共生社会とは・・・

「“多文化共生”という取り組みの必要がなくなり、その言葉自体が消えることである」

「外国人と日本人ではなく、一人の人間として考える」

「常に変化している。正しい形がなければ、ゴール時点もない。」

「色々な国の人たちが、同じような行政サービスを受けられる社会」

MIXERの企画段階では、私は、日本人向けの研修は多いが、外国人だけの会はないと思いき、「外国人の、外国人だけによる、外国人のための会があっても良い」というような考えをもっていました。趣旨として特に「答え」や課題に対する解決法を築く目標はなかったのですが、皆様の提言により、少なからず散らばっていた考えにまとまりがつかしました：多文化共生社会を築くには、外国人あるいは日本人だけでなく、皆が、皆で、皆のために励むに限るのだと。

多文化共生の原点に戻れば当たり前のことではあります。が、何事においてもルーツを辿ることは大事だと改めて思い知らされました。参加者の感想にも、長めの自己紹介とフリートークの時間が大変有意義で、先に互いのルーツをじっくり知ること、取り組んでいる事業や意見に意味を感じられるという声が多く目立ちました。

一人の外国人として、今回の企画を任されたことにより、責任と信頼を実感し、素晴らしい仲間に出会えました。外国人でありながらも日本における多文化共生に関心があり、活動的かつ日本語が話せる貴重な自治体や国際化協会の職員は、今後の多文化共生の推進を考えるうえで、ますます重要となっています。在住外国人の強みの一つである適応性を活かし、職場をはじめ住んでいる地域など、さまざまな場面で活躍できる可能性に期待をしています。



TABUNKA MIXER 参加者および主催者の集合写真